

指定研究

「デザイン学生起業家と市大ブランドの創出をめざしたデザインの研究」報告

報告：服部等作、吉田幸弘、大塚智嗣

はじめに

本研究の背景は、学部生をはじめとする大学卒業後に直面する制作作品の質的向上と就職の問題である。現在就職希望の学部生が厳しい競争状況におかれていることは、日本の美術系大学のデザイン学生 16,053 人 / 年 (内訳男子 5350、女子 10703、平成 20 年概算) が卒業し飽和状況にあることが明らかである。この統計は、教育学部生、夜間と専門学校でデザインを勉強する学生を含まないため、デザイン工芸系の膨大な学生が卒業する一方で卒業生に待ちかまえる就職が問題となっている。さらに近年リーマンショックに端を発した国内外の経済低迷、円高—輸出産業の不振、ならびに東日本大震災から、経済の好転が一向にすすまず、いまだに就職希望者にとって在学中より就職氷河期に直面しているのが現状である。

現在のところ芸術学部生の進路の選択肢は、進学 (留学含む)、就職、作家活動、その他の内容が想定できるが、従来芸術系学生の卒業後は、芸術創作活動の第一歩をふみだす学生の創作活動を重視してきた。そこで起業願望に注目すると若い時は、人脈、資金、経験の不足から踏み出せないことが多い。中小企業白書 (2011 年版) によると起業家は、約 25 万人 / 毎年、いるが、29 歳以下の割合は 14.8% (2007 年) で 30 年前より 10 ポイント近く減っている。また実際の社会要請と教育のギャップもおきている。一例として文化財の修復の求人側の要望が、賃金体系をもとに学部生を採用したい、一定のキャリア形成のため現場でそだて入社年度の格差をなくすということである。この意味するところは、最終段階にある大学院博士課程生を採用するより自前で一定の賃金基準のもとで修復専門家を育てることを意味する。この傾向は、近年一般化し博士前 / 後期課程生を高賃金で受け入れることが難しいという、求人側の現実的な状況の反映であろう。一方でデザイン工芸専攻の学生は、入学時に就職を希望する前提の入学生も多く、3 年次には学生の進路登録などサポートが実施されているが、就職を選ばず雇われない生き方をめざす起業家志向には、相応の環境形成が必要となっている。

ここで本研究が取り組む「学生起業家」というテーマは、学生の身分でありながら自身の得意技をもって起業する身構えを指向する。学生の立場で起業家を目指す前段階が、作品の発表やコンペ (デザイン公募) に取り組みであり、キャリアの形成にむけ展示会やデザイン工芸の分野の成果を企業化することである。もともと学生の能力は、直接実力が反映するため受賞歴が能力の判断に用いることがある。一方で作品公募は、企業側には新人発掘の性格があり、そのため一過性が基本となる受賞であり、常時受賞ということをさけるため再受賞が原則的にすくない。また日本の企業がアジア重視の指向から国外に受賞者を求める傾向がある。この点において絵画や彫刻分野のような既存の美術団体の公募展受賞者を取り込む動きや特定会派に所属して活動するのと異なる。昨

今の企業は、様々な事業のなかで独立会社化する傾向が一般化している。いずれにしてもプロ自覚をもつ学生起業家の意識醸成と実践への即応が必要となっている。

1. 本研究の目的

以上より本研究は、平成 21 から 22 年度の特定期研究「デザイン学生起業家と市大ブランドの創出」により学部時代の創作活動を社会実験的に適用する研究に着手した。その目的は、What to do = キャリア形成が可能で、さらに How to Do = 学生自身が起業家となる仕組みとその実践的プログラムの具体化である。



(1) デザインワークショップ開会パナー



(2) 大学芸術資料館でのエマニュエル氏講演



(3) マルコ氏、エマニュエル両氏と学生作品の指導光景

図1 イタリアデザインのワークショップ
大学芸術資料館会場光景—2009年1月10—14日

3. 問題の把握

いままで学生の起業家にむけた意識醸成と実践がなかったわけではない。専門領域のPD（ポストドクター）が理学部、工学部で顕著に問題化していることは周知の通りで、芸術系の大学も同じ問題が不可避となっている。ここで本研究に先行する研究内容を実施した。そのなかメリットとデメリットが判明した。

まず平成21年の不採択となった特定研究「椅子のデザイン」を課題にして推進し、後述する中四国家具展に出品し一定の方向性を得た。ついで21年度1月「イタリアデザイン・ワークショップ」をJETRO（日本貿易振興機構）と共同開催し、イタリアのデザイナー2名をむかえ学生起業家を目標とする指導と圈内家具産業の合同研究会を実施した。この先行研究から学生起業家に関するメリットとデメリットを事前に以下の内容が想定できた。

まず想定するメリットは、1.参加学生は、総じて習得と創造力、体力、気力があり長時間活動が可能である。2.その柔軟な視点と発想が常識に挑戦する身構えが重要となる。3.仲間/支援者が得やすく活動の持続的拡大が期待できる。4.実施にともなう責任が少ない、唯一作品に集中できる。（家族を持って起業する場合は、課題が飛躍的に増す）。5.学生の立場を利用できる（交渉、他との交流）。

つぎに デメリットは、1.社会では学生として特別扱いされず能力が直に評価される。しかし実務経験がない、能力が途上である、生活費も含めた製作資金がない、実験試作費やノウハウの習得費は自費、会社、先輩、経験者に教わることができない、2.視野が狭くなりやすい、3.学業との両立に難、4.活動資源に余裕がないため、製作—納期までの日程の余裕度がない（計画倒れの確率が高い）といった点が指摘できる。いずれにしても以上の点は個人差があるが本研究と規模の差があるが類似性が事前に抽出できた。

以上の先行した内容から学生による作品は、質と量も含めた自身の作品を領域に応じて効果的に機会創出し、刺激する必要性がある。すなわち社会に踏み込みむためにコンペ（デザイン公募）への応募、個展、公募展を問わず展示参加し作品の社会化をすすめ、より良い成果に具体化する。

以上の先行プロジェクトから学生起業家という課題と大学ブランド創出の方向性を示すことができる。学生起業家と大学ブランドの創出の方向性として先進性—伝統性、伝統工芸—デザイン・伝統とファッション性という軸のもとで学生—起業家の選択肢が考える。

学生起業家は、結果的に個人と大学がブランドとして社会に認知された成功者例は多い。その例に東京芸大生当時の杉本貴の「スーパーポテト」の起業、東京大学学生の堀江貴文の「オン・ザ・エッジ」、さらにハーバード大学を休学中にビル・ゲイツは、ポール・アレンと共同設立の「Microsoft」社を起業している。いずれも得

意技をもって社会に参加し、作品の社会進出と成果を具体化していく必要がある。

国内で新感覚デザインへの要求は高まるなか本研究の予想効果は、デザイン工芸の専攻分野—立体造形、視覚・メディア造形、現代表現、染織、金属工芸、漆、ごとの領域と学生起業家の舞台があり、すでにクールでポップなファッションをはじめデザイン感覚が溢れるクラフト（工芸）とデザインの協働が進んでいる。

4. 研究の実施内容

本研究による平成22、23年度の実施項目をあげ、代表的な内容を述べる。参加実施内容については、プロジェクトの内容を区分した。

平成22年度（2010）は、①地域力2010—東京・表参道ヒルズ会場、②大学模擬店—大学、③会津・漆の芸術祭—福島県会津市、④中四国家具展—広島・府中市、⑤ichidaiichi—大学、⑥デザインワークショップ—バン格拉デッシュ・ダッカ、⑦萩全国工芸フェスター—山口県萩市、である。

平成23年度（2010）は、①大学模擬店、②会津・漆の芸術祭、③中四国家具展、④ichidaiichi、を実施した。以下に各参加プロジェクトの内容を述べる。

4.1 地域力2010—東京・表参道ヒルズ会場

図1に「地域力2010」に出品した学生作品（一部卒業生）と表参道ヒルズ会場の光景を示す。日本商工会議所主催で「和のちから」をキーワードに基本的な参加資格は企業、業種も県を代表するという条件のもと、広島県で広島市大の地域連携プロジェクトとして応募、最終的に全国33事業主の参加が認められたなかで唯一の大学からの参加となった。参加学生は、すでに学生起業家した卒業生をふくめ7名（漆、染織、家具、立体造形）が参加し、開会期間中にデザインの契約や制作交渉があった。次年度も参加予定した「地域力2011」は、東日本大震災により事業そのものが中止となった。[図2]



(1) 市大展示ブース計画



(2) 表参道ヒルズ会場



(3) 会場と展示ブース



(4) 参加スタッフ(一部)



青木聡子(染色),
Calendar



入江早耶(マイクロフィギア),
MIYAJIMA



上野晃宏(楽器)
マラカスピーカ



釘田浩生(家具),
Furniture Stock



舩岡真伊(漆),
Toty Pop Series



竹岡亜依(漆),
sea elf



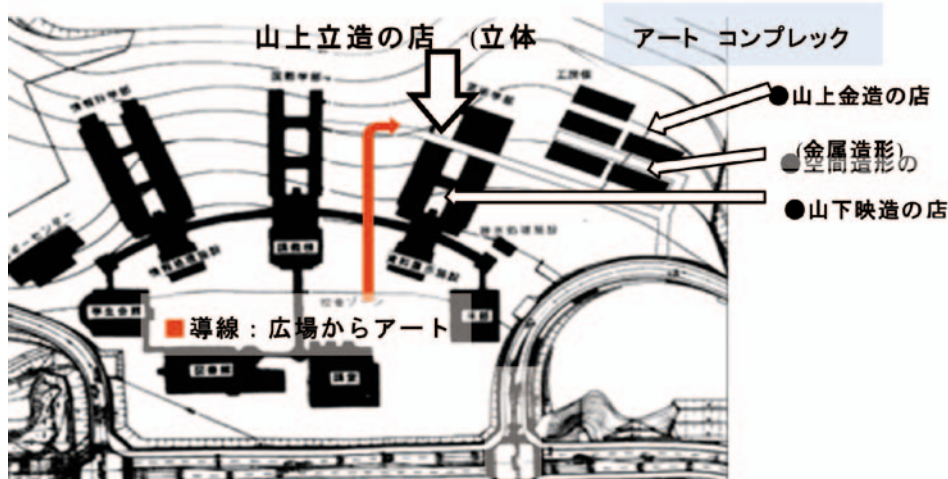
宗貞明日香(家具)
Swing Chair

(5) 展示販売作品

図2 地域力 2010・表参道ヒルズ展参加と展示作品

4.2 大学模擬店

図2に大学模擬店のコンセプト（デザイナー）と大学模擬店の光景を示した。[図3]



(1) 学生デザイン作品との出会いスペース・コンセプトと導線図



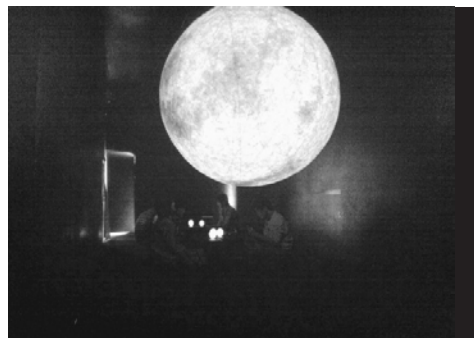
(2) 創業模擬店ギャラリー (2000年10月)



(3) (2009年10月)



(4) ギャラリー・アリスの部屋 (2010年10月)



(5) ヤミツギギャラリー 2011年10月



(6) エントランス (2011年10月)

図3 新しいアート作品との出会いスペース 2000年～2011年

模擬店は、学生の専門性とデザインの能力を高める絶好の場とするコンセプトで実施をすすめてきた。

模擬店と称しているが、その基本コンセプトは、大学の3学部を横断する回廊部をショッピングモールに配置する、アートの専門店をめざしている。各回廊に沿って模擬店を展開し製作をすすめるコンセプトのもと各模擬店は、それぞれ学生の専門性を活かせるギャラリーとして展示と販売のスペースを設け、飲食・喫茶の機能を二次的とする。したがってギャラリーは、それぞれ専攻の特色がわかる名称を冠して展開する。例として山上立造の店（立体造形）、山上金造の店（金属工芸）、山上映造の店（メディア造形）、山上染造の店（染織造形）、山上うるしの店（漆造形）と言った具合である。各専門店は、未完成であるがそれぞれ実際にギャラリー+飲食機能から展開し、在学生、卒業生のたまり場として入場者から好評となるように目指している。

4.3 会津・漆の芸術祭 2010、2011

図4に会津・漆の芸術祭2010の準備風景と展示会場を示した。[図4] 会津・漆の芸術祭2010のコンセプトは、「漆のくに・会津」で、漆に出会う、会津をめぐる、会津に触れるである。会津若松市と喜多方市他四地区で公開展示会場が約50箇所に参加出品者数約100名(作品数約100点)が2011年は、東日本大震災により福島県に甚大な被害を被ったため、支援の意義が加わる開催状況となった。プロジェクトの主体は、会津・漆の芸術祭2011プロジェクト委員会とし福島県の支援(教育庁、福島県立博物館)が加わる。

本プロジェクト参加は、会津の地域文化、地域資源の核たる漆をテーマとした芸術祭の参加見学を通じ、工芸—アート、伝統—拡伝統の新産業領域から漆の造形表現を探り、学生起業家、市大ブランドといった創出効果を目指している。会津・漆の芸術祭では、漆研究室の『『縁がわ』プロジェクト』として作品発表し、芸術祭



(1) 会津漆の芸術祭・2010 参加準備の光景



(2) 会場の光景（会津市内）



(3) 縁側プロジェクト準備光景

図4 会津漆の芸術祭～東北へのエール

の会場である会津若松市と喜多方市内に点在している漆アートを辿り、会津漆の新ブランド産業を進めている「BITOWA」を調査した。本芸術祭に参加の成果は、漆の歴史をもつ街の職人や漆造形アーティスト、現代美術アーティストなどが一体となり街をあげて行った、漆の新たな楽しみ方や漆の魅力と可能性を再発見する機会となった。また西洋的な生活への変化に漆工芸が生活の必需品としての新たな動向を知ることができた。

2011年 会津漆の芸術祭～東北へのエールは、東日本大震災を通し人とのつながり—子どもから高齢者までが笑顔で集える『縁がわ』空間を、コミュニケーションの場として広島県内の4カ所でワークショップを開催した。東北へエールを送るためベンチが復興への想いのもと、色漆をスタンプし、カラフルな完成したベンチを「会津漆の芸術祭～東北へのエール」会場にてあたたかみのある漆のベンチが展示でき、町に常設設置することで広島から東北の人々に寄り添い続ける震災への復興応援メッセージを伝えることができた。

本研究で明らかとなった今後の課題は、“新しい漆”の行くさきを探るため漆産業全体の取り組みの再構築が必要となっている。

5. 中四国家具展

図5に中四国家具展と学生作品を示した。椅子のデザインの課題「座・すわるかたち」の作品（3年次前期）を2010年の9月4～5日の福山産業交流館で第7回中四国家具合同展に協賛参加、および平成23年の11月9～10日にかけて広島県立広島産業会館「秋の新作家具発表会」に協賛出品した。椅子は近年の、インテリアブームから高い人気が集まり、確かな技術と学生の新鮮な発想のデザインの協働を通じ価値創造の展示会となった。前述したイタリアデザインワークショップで起業家の話題もあり、中四

国家具合同展協賛組合は、広島家具工業協同組合を主管に府中市、岡山県、島根県、鳥取県、香川県、徳島県の家具業界が参加し学生の出品作品への関心は高い。[図5]



図5 中四国家具展会場 2010 パナー

4.5 ichidaiichi (市大市)

図6に大学模擬店の学外版である ichidaiichi の展示光景を示した。[図6]

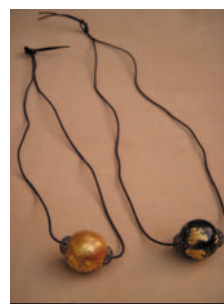
コンセプトは、大学ブランドで出品することにあるが、デザイン工芸学科の学生、院生による作品を販売する。店舗は、広島市の中区紙屋町の地下シャレオのモールの空き店舗を活用するものである。作品は、出品のために制作されたものもふくめ、オープンキャンパス、大学説明会でノベルティとして無料配布し、大学のPRに大きな貢献し、大学のブランドイメージの向上に貢献できた。



(1) ICHIDAIICHI シャレオ会場入口光景



(2) 展示ブースの光景



(3) 学生制作の展示販売品

図6「ICHIDAIICHI」本通りシャレオ会場 Dec. 2009 to 31th.Jan 2010

4.6 ダッカ DTC デザインセミナーへの参加

図7にダッカ DTC における国際デザインセミナーの発表光景を示した。[図7]

セミナーは、本学芸術学研究科の教員と博士後期課程生 2 名が講演と研究発表で構成し 2010 年 3 月 10 日に開催した。講演者と内容は、「Product Design in Japan and Its Sustainable Design Now」(広島市立大学教授・服部等作)、「Bamboo in Peru and Japan」(ペルー国費留学生博士後期課程 3 年・Adriana ChangFon)、ならびに「Aesthetic Sustainability」(博士後期課程 2 年・Martin Schatz)による。本取組は、バングラデシュの DTC (Design Technology Center) との共催で実施し、バングラデシュ・ダッカ芸術センターを会場に実施した。会場には DTC の関連企業に所属するデザイン関係者約 80 人が来場。会場では質疑応答、情報交換会があり、成功裏に終了した。また、3 月 11 日(金)にバングラデシュ最大の家具メーカーの企業見学と企業研修の機会創出、ならびにマーケット戦略についての意見交換、3 月 13 日(日)には現地のデザイナーなどとワークショップも実施。3 月 14 日(月)に日本の JICA(日本国際協力機構)ダッカ事務所とバングラデシュとの今後の研究交流を提案した。本研究は、本学の指

定研究にもとづく学生起業家の自立支援を目指す研究の一環である。

本研究の成果：発表を行った院生の 1 名が本交流を機に DTC とデザイン契約を行い、エコデザインを指向したデザイン開発を実践する機会を得た。今後もバングラデシュ政府と継続的な研究交流を行うことにしている。

4.7 萩全国工芸フェスタ

最後に本研究で未参加となった全国工芸展—山口・萩展(2010)がある。本展へ参加ができなかった理由は、実行事務局が作品の公募形式による応募要項の決定が締め切り三週間前と遅く、さらに出品作品を山口県内のデザイン関係者に限定しているという条件が直前にくわわり、展示作品の計画—製作の時間的な制約を考え、出品と参加を中止した。このような官公庁のデザイン振興策にそった全国規模の工芸展は、経済産業省の「JAPAN ブランド」の創出事業、全国工芸フェスタの取り組み、広島県の府中家具など産地振興プロジェクトが積極的に取り組まれているが、今後は、「地域力 2010」のように学生作品の出品展示、参加可能となる確かな情報の獲得が必要となる。

SEMINAR ON DESIGN PERSPECTIVES
from Japan, Peru and Germany

hosted by **Design and Technology Centre Ltd.**
House 278, Road 14, Block C
Bashundhara RA, Baridhara
Dhaka, Bangladesh

TEL 8401553-4
e-mail: atd@dtc-bd.com

AT DHAKA ART CENTRE 10th MAR 2011
House 60, Road 7A Dhanmondi, Dhaka

1st SESSION
15:30 - 16:00
JAPANESE PRODUCT DESIGN
Prof. Dr. Tosaku Hattori gives an insight into the history of Japanese product design from the 1970's until today and explains the Japanese aesthetic concepts of *misaji* and *wabi*.

2nd SESSION
16:15 - 16:45
BAMBOO IN PERU AND JAPAN
Adriana Chang talks about bamboo uses and manufacturing in Peru and Japan and the need of design intervention for the sustainable development of Peruvian rural craft communities.

3rd SESSION
17:00 - 17:30
AESTHETIC SUSTAINABILITY
Martin Schatz introduces his research on human-object (long-term)-relations and illustrates the connections between product aesthetics and sustainability.

In cooperation with **Hiroshima City University**
3-4-1 Ozuka-Higashi, Asaminami-Ku
731-3194 Hiroshima, Japan

Prof. Dr. Tosaku Hattori
TEL +81-82-830-1374
e-mail: hattori@art.hiroshima-u.ac.jp

(1) デザインセミナー案内ポスター



(2) デザインセミナー講演会場と質疑応答光景



(3) 講演発表の光景

図7 デザインセミナー(バングラディッシュ・ダッカ芸術センター)

5. まとめ

今回の学生起業家をテーマにプロジェクト毎に作品発表と参加をもって起業家への一端を試行することができた。同時に様々な問題点として、常時利用可能な会場の問題、学生固有の制作費不足からくる作品の完成度と納期が問題となる。本研究により、前述した成果からも学生の製作経費(制作費用、輸送費など)などで負担が軽減できたことは大きい。しかし地域力2010のように作品発表の場として最適であると同時に人目にふれることで著作権や知的所有権といった権利化に対応できない問題もある。事前の参加費だけでなく、事後の権利処理の問題まできめ細かな学生起業家の対応策が必要であるため、今後の継続研究がのぞまれる。最後に本研究の報告についてプロジェクト参加学生で Martin Schatz, AdrianChang, 桐原絵梨子、竹岡亜依、舛岡真伊、釘田浩生、宗貞明日香、入江沙耶、上野晃宏、青木聡子、稲津あき子、ならびに紙面の関係で全員をしめすことができないが多数の参加メンバーの協力で実現できた。ここに謝意を示す。